

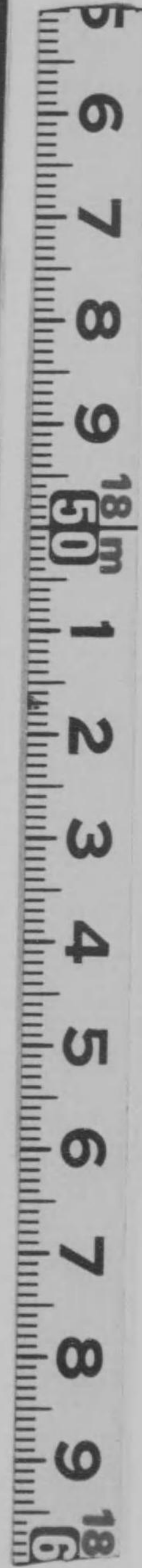
393

10

趣味の俚謡

作山美八編

国立国会図書館



始



エト20-15

福島縣双葉郡視學 吉田庄太郎君序

木戸實業補習學校長 作山美八君編

趣味の俚謠

東京 常磐堂書店

393-10



本書の印行は本村青年分團長勳八等渡邊愛丸君が叙勳披露の祝賀費を節し余が俚謠改良事業に替して深厚なる援助を與へられたるの結果なり、茲に特記して君の好意を謝し併せてその美舉を推賞す

編者識

大正
9. 7. 4
内交

序

畏友作山美八君は青年指導上特傑せる研究技量を有し、且つ特に文藻の趣味豊富にして、多年此の方面に關し貢献努力せられたる所少からず。

曩に請戸小學校長在職中、或は田園趣味俚謠集を編し、或は校定子守唄を著し、地方教化上一段の光彩を發揮せられたるは最も顯著なる事績なりとす。

而して君は公務の餘暇、再び茲に趣味の俚謠一卷を編し、印行に際して余に序を求めらる。本書は章を分つこと十二、津々たる情趣野趣

隨所に横溢して、宛然田園の精華を網羅せるの感なくんば非ず。

惟ふに俚謠は國民的思想感情が、古今幾千載の久しき洗練により、通俗的地方的に具象せられたるものと言ふを得べく、諷誦之を久しうして、或は堅實なる精神を涵養し、或は快活なる感情を陶冶する等、その徳澤あげて數ふべからず、古來教育爲政の當事者が、常に深くこの方面に留意したるもの洵に謂れなきに非ざるなり。

君のこの舉は以て田園的趣味の涵養に資すると共に、一面青年處女等に對し、品性陶冶の上に甚深の感化を及ぼし、御べき事言を俟たず、社會教化の爲愉快洵に禁すべからざるものあり、一言所感を陳べて序となす。

大正九年三月

双葉郡視學 吉田庄太郎

例言

余は嘗て田園趣味俚謠集を編して、一味清新なる趣味の汎く一般に普及せん事を期したりき。幸ひにも同書は地方青年諸子の歓迎する所となり、版を重ねて尙その需要を充たし得ざるの盛況を呈しぬ。

爾來數年更に新古の諸書を繙き、又廣く各地の知人同好の士の援助を得て、茲に「趣味の俚謠」一巻を編せり、讀者願くは本書によりて、野趣に富める俚謠の情味を感得し、兼て良風美俗の達成に資し、併せて益々田園生活の幸福を嘆美せられん事を。

尙郡視學吉田庄太郎君が、特に序して本書の編著を賛せられたるは

著者の光榮とする所なり。

二

編者識

追記

本書は小著田園趣味教訓俚謠集と併讀せられん事を望む、そは此の集をして彼の著の續篇とし、些か遺りたるを補はんとするの試みなればなり

趣味の俚謠 目次

- 一、名家吟の部……………一
- 二、文字工夫の部……………三
- 三、歴史人物の部……………五
- 四、地理名所の部……………八
- 五、花鳥風月の部……………一六
- 六、皮肉滑稽の部……………二二
- 七、仕事の部(補遺)……………三三

草刈唄、馬方唄、船唄、木挽唄、仕事唄の雜……………一

八、思慕愛情の部……………三九

九、雑の部……………四三

十、子守の部……………四四

十一、酒の部……………五〇

附録……………五三

滑稽早口練習文句……………五三

趣味の俚謠

一、名家吟の部

作山美八編

- 九尺二間にすぎたるものは
- お月様さへ泥田の水に
- 朝顔がたよりし竹にも振はなて
- 龍田吉野も見る人なけりや

- 紅のついたる火吹竹(頼山陽)
- おちて行く世の浮き沈み(同)
- うつむきや涙の露がちる(同)
- 花も紅葉もたにの塵(同)

○井戸の蛙とそしらばそしれ

花もちりこむ月もさす(同)

○四海波でも切れる時は切れる

口約束でも二世三世(河合繼之助)

○欄干に凭れて化粧の水を

どこに捨てよか虫の聲(小松帶刀)

○雪の肌はだえに氷こほりのやいば

露の生命のすてどころ(同)

○偽うそも誠まことも賣うる身みの勤つとめ

そこで買手かひての上手下手じょうすべた(同)

○三千世界せんさいの鳥かすをころし

主ぬしと朝寝あさねがして見たたい(高杉晋作)

▲維新前の作眞意を思ふべし

○龍田川たつたがは無理むりに渡わたれば紅葉もみぢか散ちるし

渡わたらにやきかれぬ鹿しかの聲こゑ(同)

○苦勞くろうする身みは何なにいとほねど

苦勞くろう仕し甲斐がひのあるやうに(同)

○何なにをくよ／＼川端かはばたやなぎ

水みづの流ながれを見みてくらす(同)

○末すえは涙なみだをしぼると知らで

濡ぬれて見みたさの花はなの雨あめ(陸奥宗光)

▲日清戦争將に開始せんとする時の作

○我われを立てねば悪事あくじは出来できぬ

知しれよ心こゝろに我われはない(手島堵庵)

○誰たれに見みしよとて口紅くわくわ鐵漿てんじやうつけよ

みんなお主ぬしの爲ためぢやわい(頼山陽)

○無學むがく無筆むひつは獨身どくしん者ものよ

てんで讀よめ(嫁よめ)ない書かかア(嬬か)ない(和田垣博士)

二、文字工夫の部

- 孝と言ふ字を分解すれば
老をいたゞく子でござる
- 松といふ字を解剖すれば
公と木との差向ひ
- 松といふ字は開化の文字よ
當世はやりの公と木
- 妾といふ字を分析すれば
家に波風立つ女
- 意見の意の字を分析すれば
義理を立てよと言ふ心
- 主は二十一わたしは十九
四十仲よく暮したい
- 忍といふ字は及に心
心なければ忍ばれぬ
- 松といふ字をさかさに讀めば
つまとなるので私やうれし
- 戀のいろはを卒業すれば
それから散りぬる親の金

- 四角四面に十の字入れて
力といふ字で國を持つ(男)
- 平假名くの字に片假名ノの字
一といふ字で家を持つ(女)
- 風も吹かぬにあれ見やしやんせ
の、字ころがす鉤屑
- 垣の朝顔つぼみは筆よ
示しゝりゝし
- いろはのいの字によく似た姿
二人で小舟を漕ぐところ

三、歴史人物の部

- 相馬こひしやお妙見さまよ
はなれまいとのつなぎ駒
- 竹に雀は仙臺さんのごもん
相馬六萬石九曜の星

- 捨てたその子を又ふところに
- 闇の夜に来て櫻をけづり
- 西郷隆盛いわしか雑魚か
- 西郷隆盛枕はいらぬ
- 薩州西郷さんにやりたい物は
- お七火に死にお初は刃
- 相摸横山照手の姫は
- 興作丹波の馬追なれど
- 哀れなるかな梅若丸は

六
 だけとひいた霜の鐘
 赤い心を墨で書く
 たい(隊)におはれて逃げてゆく
 いらぬ筈だよ首がない
 金のなる木と弾薬
 あすは誰が上戀の果
 夫の爲とて車曳く
 今ちやお江戸の刀差
 知らぬ東國に隅田川

- 向う通るは清十郎ぢやないか
- 力山を抜く項羽でさへも
- 興作思へば照る日もくもる
- 早野勘平は二十九で死んだ
- 天氣よければ松代様の
- あれへ見ゆるは殿様船だ
- 本間様には及びもないが
- 長州征伐さらりとやめて
- 長州様とは夢にも知らぬ

七
 笠がよう似た菅笠が
 虞氏の別にや血の涙
 關の小萬がなみた雨
 お輕可愛や若後家ぢや
 時の太鼓の音のよさ
 葵御紋の帆をかけて
 せめてなりたや殿様に
 異國征伐するがよい
 金の拂ひで氣がついた

- 昔千年屋島のいくさ
- 伊賀の上野の新七様は
- 酒は敦盛さかづき熊谷
- 紀州さんでは葵の御紋
- 花の敦盛十六歳の
- こゝは一の谷敦盛さんの

今にござんす繪にかいて
 薬で髪ゆふて五千石
 のんで差すのは一の谷
 丸に三つ引き長門さん
 急いで行くのが一の谷
 お墓どころかなづかしや

四、地理名所の部

- 一升かついで花見にごされ

銚子、神鳴、木瓜の山(磐城大堀村)

- 花を見るなら小丸の入りの
- 御座れ初午に蛇澤の稻荷
- 相馬流山さゝたかござれ
- 急げ早よ漕げ桑名の船頭
- 奈良の南都のお春日山の
- 磯で名所は大洗様よ
- 磯で曲り松湊で雌松
- 行かうか詣りませうか米山薬師
- 行かうか柏崎かへらうか新潟

銚子、神鳴、の一宮(同)
 歸り土産に風車同(福浦村)
 五月中の申お野馬追
 やがて熱田の宮につく
 白い鹿の毛が筆となる
 松が見えますほのくくと
 中の祝ひ松男松
 一つ身の爲主の爲
 こゝが思案の寺泊り

○忍路高島及びもないが
 ○大磯今朝出て程ヶ谷どまり
 ○安藝の宮島まはれば七里
 ○木曾の御嶽夏でも寒い
 ○見ましよ見せましよ裏戸をあけて
 ○水戸をはなれて東へ三里
 ○土佐はよい國南をうけて
 ○宇治は茶所茶の縁どころ
 ○面白いぞい木曾路の旅は
 ○せめて歌棄磯谷まで
 ○花の藤澤ひるはたご
 ○七里七瀬七惠比壽
 ○裕やりたや足袋そへて
 ○月の名所は桂濱
 ○浪の花ちる大洗
 ○薩摩あらしがそよくと
 ○娘やりたや婿ほしや
 ○笠に木の葉がまひかゝる

○來いと言ふも行かりよか佐渡に
 ○わしが事かや志賀唐崎の
 ○二度と行くまい丹後の宮津
 ○伊勢は津でもつ津は伊勢で持つ
 ○箱根八里は馬でもこすが
 ○坂はてるく鈴鹿はくもる
 ○今度ござらば持て来てたもれ
 ○潮來出島の眞菰の中に
 ○箱根山をば暗しと通り
 ○佐渡は四十九里波の上
 ○一つ松とはたよりない
 ○縞の財布がからとなる
 ○尾張名古屋は城でもつ
 ○越すにこされぬ大井川
 ○あひの土山雨がふる
 ○伊豆のお山の竹柏の葉を
 ○あやめ咲くとはしほらしや
 ○花の小田原星月夜

- 山家育ちと笑はゞ笑へ
- 相馬々々と木萱もなびく
- 沖のくらしいのに白帆が見える
- 尾張名物宮重大根
- お江戸出てから戸塚は泊り
- 竹になりたや桐生の竹に
- 郡山より本宮よりも
- 會津盤梯山は實の山よ
- 江戸で御殿山最上でかみの山

吉野初瀬は花どころ
 なびく木萱に花が咲く
 あれば紀の國蜜柑船
 金のしやちほこ雨ざらし
 駒を早めて藤澤へ
 繻子や綸子のあや竹に
 こさば會津の東山
 笹に黄金がなり下る
 こゝは會津の東山

- 頸城見をさめ米山三里
- 新潟こひしや白山様は
- 能登の岬のあの御所ざくら
- 佐渡に三十日粟島に七日
- 木曾で御嶽甲州ぢやみ嶽
- 竹になりたや建部の竹に
- 見たか見て来たか姫路の城を
- 由良がましかよ洲本がましか
- 洲本見やうとて加茂まで行つたら

峠こえれば柏崎
 松が見えますほのくくと
 花は越後に實は佐渡に
 思ふ新潟に唯一夜
 西ちや乗鞍鎗が嶽
 諸國諸大名の弓の竹
 城は五層で七櫓
 由良がましぢやよ舟つまぢや
 洲本かくしの霧がふる

○宇治はよいとこ北西うけて

○わしの國さで見せたいものは

○勢多の橋から豆腐屋が見える

○作州津山のお城を見りやれ

○伊達の川俣自慢ぢやないが

○伊達の川俣羽二重どころ

○花の飯坂何見てくらす

○佐渡はよいとこ金山所

○越後名所か霜夜の棄兒

東山風そよ／＼と

勢多の唐橋金ぎぼうし

あれが豆腐屋が膳所の城

知らでながめりや五十萬石

唄も上手に絹を織る

娘あげます機織りに

温泉の煙を見てくらす

浪は四十九里寝て通ふ

ないて子知らず親しらす

○花はみ吉野嵐の山よ

○梅は岡本櫻は吉野

○一に當麻の糸掛ざくら

○今度行つたら持て來てあげよ

○奈良で名所は猿澤の池

○淀の小橋はあぶみか鞍か

○大原木召せ／＼黒き笹を召せ

○松は唐崎時雨は外山

○宮で咲く花朽木でられる

月のながめは須磨明石

蜜柑紀の國栗丹波

奈良の都は八重ざくら

有田蜜柑の枝折を

氷が半分は魚半分

諸國大名の下り上り

こくもうすくもきこし召せ

月の眺は須磨明石

ちつて流るゝ巴波川

- 奈良の大佛金がよ木かよ
- 彦根よいとこ後は山で
- 田舎なれども南部の國は
- 關は旭よ杵築は夕日

中は檜のあらけづり
前は湖水の竹生島
西も東もかねの山
名所出雲の西東

五、花鳥風月の部

- 意氣な刈萱あただめく桔梗
- 岩間かくれのつゝじでさへも
- 花を咲かせて又散らすとは

そして風情なおみなへし
燃ゆる思の色にさく
心ないぞい春の風

- 咲いた櫻になせ駒つなぐ
- ばらも牡丹も枯れば同じ
- 馬鹿になさるな枯木ちやとても
- 梅の香ひを櫻にもたせ
- 山で赤いのはつゝじに椿
- 咲いた櫻に手はとゞけども
- 松になりたや有馬の松に
- 花は折りたし梢は高し
- 雪の化粧をさらりとやめて

駒が勇めば花がちる
花で有りやこそ別けへだて
藤がからまりや花がさく
しだれ柳に咲かせたい
咲いてからまる藤の花
よその花なりや見て戻る
藤にまかれて寝たうごさる
眺めくらすや木の下に
素肌自慢の夏の富士

伊達正家作とい

- 高い山から谷底見れば
- 窓の障子に墨繪の竹を
- 一人山道物すごゝざる
- 雲の帯して空色小袖
- 梅や櫻は七重も八重も
- 秋が来たかよ鹿さへ鳴くに
- 何も言はずに唯うつむいて
- さんさ時雨か萱野の雨か
- 春の鶯何着て寝やる

瓜や茄子の花ざかり
 書いたり消したり風の月
 早く聲出せほとゝぎす
 伊達をするがの富士の山
 なせに野菊は一重さく
 それに紅葉は色づかぬ
 思案して咲くけしの花
 音もせで来てぬれかゝる
 花を枕に葉をかけて

- 桔梗首振る薄はまねぐ
- 雪の庭口誰がふみ分けた
- 心ありげに散り込む花を
- もゆる思を消さんとするか
- 千里胡砂吹く風さへたえて
- 梅にがらまる柳の糸を
- 鳴くにやなかれずとんでも行けず
- 好いた水仙好かれた柳
- 可愛らしいは豌豆の花よ

秋の花野の面白や
 二の字崩れの下駄の跡
 載せて棹さす筏船
 野への螢の露にねる
 淋し馬子唄冬の月
 解きに來たのか春の風
 心墨繪のほとゝぎす
 心せきちく氣は紅葉
 花は小花でこむらさき

- わしの心ははちすの花よ
- 情ないぞや師走にさひて
- さつさふれ／＼板屋に霞
- 沖の鷗も舞子の濱よ
- ちらと見そめたあの程のよさ
- 紅葉ふきしく嵐の末は
- 路をたづねて行くその人を
- 森の間からお寺が見える
- 鯉の瀧上り何見て上る

二〇
 泥氣はなれて清くさく
 霜にうたれる梅の花
 霞ふらねばものさびし
 波のつゞみに松の聲
 霞がくれの薄櫻
 花をさかせる木々の雪
 招ぐあしたの花すゝき
 お寺淋しや小僧一人
 水の出花を見てのぼる

○たつた一つに幾億萬の

目星つけたる今日の月

六、皮肉滑稽の部

- 金が有るとて高慢ぶるな
- お醫者の背中に雀がとまる
- 可愛がられて又憎まれて
- やつた手紙が一々胸に
- 内の姉さん粉ひさやねむる
- まゝにならぬとお櫃をなげた

佐渡ぢやみゝすが糞にひる
 とまる筈だよ藪だもの
 可愛がられた甲斐がない
 さく筈その字は釘の折
 團子喰ふときや皿まなこ
 そこらあたりは飯だらけ

○石の地藏さん頭が丸い

○關の地藏に振袖させて

△○富士の山をばとんびがさらふ

○奈良の大佛に帆柱もたせ

○坊さん頭へ飯粒つけて

○寺の門口に蜂が巢をかけて

○裸ちや行かれぬ着て行かしやん

○ぼんと叩かれも一つたのむ

○今朝も今朝とて柱に頭

二二

鳥とまれば投島田

奈良の大佛婿に取る

奈良の大佛蟻がひく

鯨つらせたい五島浦

章魚の丸壽司よく出来た

坊主出りやさすはいりやさす

背戸の木小屋に菰がある

そこらが虱の集會所

あいたかつたよ目に涙

○笠を忘れたよ峠の茶屋へ

○姑嫁ふる嫁下女をふる

○文の長さはおほよそ五尺

○金のなる木を一本ほしや

○お椀百まで箸九十九まで

○立てば借金すはれば屋賃

○禿げた頭を虱が上る

○橋のぎぼしゆを五兵衛かとおも

○盆になつたら紺屋がやけた

雨の降る度び思出す

下女は釣瓶の繩をふる

用は無心の一くだり

それを育て、孫にやる

共に汁椀はげるまで

歩く姿は質づかひ

なんて此の山すべるだろ

すでに言葉をかけよとした

伊達な浴衣を白で着る

二二

- 思出して見りやをかしようてならぬ
- 柿の四割三つまでもろた
- よかれ悪かれ私のあるに
- 親は二十歳で子は二十一で
- 雨はふつて来る洗濯物ぬれる
- 寺の坊さん博奕がすきで
- 可愛がられてなでさすられて
- 頭茶鬘でも片びん無うても
- どこいしよくと田舎の角力

綿の中から糸が出る
あとの一つが氣にかゝる
火箸で餅やく面にくい
何處で算用がらがふたやら
背中で子が泣く飯こげる
阿彌陀如來さんを質におく
見捨てられたよ夏火鉢
倉にお米のあるがよい
こけつまるびつ又どこいしよ

- 蓆打ちちやと輕蔑するな
- 箱根八里は腕でもこすが
- はげた頭に南瓜の頭
- 二足四足は身をあたゝめる
- 野暮な意見を言ひたかないが
- 似ても似付かぬ縁ならよしな
- 盆の十六日盆棚流す
- 人は嫁とる婿とる中に
- 何と考へても占おいてみても

内の隣にや藏もある
こすにこされぬ大晦日
どれが禿やら南瓜やら
利息催息寒氣立つ
これも年故是非がない
鴨と家鴨は値がちかふ
私や貧乏で質ながす
私や日向でしらみ取る
胼は向脛のかげにある

- 借金かついで天秤おれた
- 富士の山程ぼたもちあらば
- 泣いて涙をこぼさぬものは
- お前をかしかろ私やごせやける
- 無駄な事した今年の夏は
- いくらお前は手利ぢやとて
- 石で巾着縫ひやうもござる
- 石は流れる木の葉はしづむ
- 見たいのみたい食ひたい着たい

貸(橙)でもあつたら折れやせぬ
 親子三人ねてくらす
 千兩役者と猫ばかり
 背戸の南瓜を盗まれた
 ならぬ大角豆に手をくれた
 石で巾着ぬはれまい
 砂で金糸よりたまへ
 ほんに此の川さかさ川
 金もとりたいあそびたい

○金が威光の横柄顔も

○鬼が餅つきや閻魔がこねる

○鋸と鎌と流れて下る

○頭はりま町顔赤い町

○死なば夏しね虻蚊も送る

○薪をうりに出て賣名を忘れ

○螢うりに出て賣名を忘れ

○盆の十六日お寺で施餓魂

○招ぐ螢は手許によらず

昨日限りの三途川

そばで地藏様がなめたがる
 どこの木挽が死んだやら
 なで、見たればくぼの内
 螢松火蟬お経
 兄さんの楊子はいりませんか
 小人島の電気燈はいりませんか
 蟬がお経よむ木のしんで
 拂ふ蚊が来て身を責める

○盆が来たので茄子の雑炊

○昆布で尻根茸き細藻でしめりや

○やせた男はしんから可愛

○道中雲助花なら蕾

○四村四在所にお醫者はないか

○私言ふ通りお前さく通り

○心短氣なあなたにそへば

○本もよみたし朝寝もしたし

○親は苦をする子は樂をする

あまりあついで鼻やいた

雨のふる度び芳汗が出る

骨と皮とでにく氣ない

立場々々で酒々と

花の二十一を見殺した

山の鳥はなくとほり

茶碗枕でひやくと

二つ有る眼はまゝならぬ

やがて此の孫を食する

○寺の坊さん男ぢやけれど

○寝巻質においてしやも鍋くつて

○當になるやうでならないやま

○山てくろいのは炭焼き老爺

○なせかお前は祭の牛で

○まゝよ三度梅毒横根にからみ

○猫がなきます足袋屋の前で

○はいよ〜でのむ時はよいが

○えらい顔して高座へ上り

さんで死んだよ二十三で

しやもくて(寒くて)〜〜ねむられぬ

お前のもつたる安時計

又もくろいのは熊の皮

人の囁子にのりたがる

旅は二本杖湯は草津

にや〜文半(七文半)だといって泣く

あとの算用で困ります

おちて碎ける鬼瓦

- わしはお多福自慢ぢやないが、ころんで鼻うつ世話がない
- 山高帽子は伊達には被らぬ 頭の禿げたをかくす爲
- 青い眼鏡は伊達にはかけぬ 下り眼尻をかくす爲
- いくらしやれても町の者は分る 米の高い時や眼がくぼむ
- 向う通るは大工の嫁さ 裾にかんなの模様つけて
- こんな月夜に提灯つけて いくら蠟燭屋の娘でも
- ひどい姑にわしや取りつかれ 岩を袴に切抜けと
- 岩を袴に切り抜くよりも 水に繪をかけこれ姑
- 相馬よい所女の夜延 男極楽ねてまぢる

三〇

- へらと杓子とそろへて見れば どうやら杓子は猫背中
- 送る手紙は二重に封じ 中は一重にねがひます
- 逃げる覺悟で二足のわらぢ 一足かついで一人旅
- いろはも書かないあの野暮男 ふみかきましたよ下駄の齒を
- 若菜買うとて葛の葉かうて それを信田のひたしもの
- 一人娘とお寺の猫は 可愛がられてやせほそる
- 夜の夜遊朝ねの元ぢや 世帯知らずの伊達男

七、仕事の部 (前著の補遺)

▲草刈

○あした野に出で草刈すれば

○小褌ぬれても心は濡れぬ

○うたひ出したよ朝草刈が

○朝に草刈や殿の身がやせる

○思忘れて又ね忘れて

○長狭細野で刈る朝草は

○草を刈るなら藪の根を刈やれ

○草を刈るときやいばらが辛い

露で小褌が皆ぬれる

妻と定まりや濡れもする

ねむた寝聲でほそんと

草を刈るやうな野郎ほしや

今朝の朝草ひるぐさに

小笹交りで駒がすく

藪の根をかりや草たまる

内へかへれば姑つらい

○桔梗かるかや小たばにさして

○起きて行かねか朝草刈に

○今朝の朝草どなたがお先

○可愛殿御はあの山かげで

▲馬子唄

○馬は六才七つは盛り

○よくも染めたよ馬追のゆかた

○馬がよければ馬方までも

○駒は各物風ふくたびに

意氣な嫁だと言はれたい

鶏も鳴きますはらくと

可愛殿御の露ばらひ

草を刈るやらまるくやら

人は二十一二がさかり

肩にかけ駒すそ栗毛

馬が勇めばいそくと

ひんと嘶き尾筒ふる

- 馬にやほれねど馬方様の
- 馬は戻つたにち主は見えぬ
- 二兩にかうた馬十兩にうつて
- つらいものだよ馬喰衆の夜道
- 馬の鈴なり馬子衆とおもふて

つけた荷物の程のよさ
 關の小萬がとめたやら
 八兩もうけた初馬喰
 夜はくつわの音ばかり
 三度出て見たよ門のべに

▲船 唄

- 船ぢや寒かろ着てゆかしやんせ
- 沖のかもめに潮時とへば
- 舟のともづなとく々々時は

わしが着がへの此の裕
 私や立つ鳥波にきけ
 舟子勇んで真帆あげる

- 平戸瀬戸から船が三艘見える
- 私の情合さんは此の濱沖で
- 様が船かや神崎沖の
- 船は新造でこぎよいけれど
- 船の船頭とつばめの鳥は
- 船頭必ず高帆をやるな
- つゝじ椿は野山をてらす
- 相模灘をば兩手に拜む
- 沖で見た時は鬼島と見たが

○にやの字の帆がみえる
 雨にしよぼぬれ鯉つる
 霧がくれに帆が見える
 素人造りであか(海水)が入る
 いつも春來て秋もどる
 風に情があるものか
 様の千船は海てらす
 可愛旦那の乗る中は
 陸へ上ればなさけ島

○わしの思をどさくさつんで

○月夜暗夜といはずにおじやれ

○今宵一夜は緞子の枕

○湊はまべに拾ふもうれし

○鳥羽の湊は入りようて出ようて

○富士は腰やみ伊豆路はくもり

○船の船頭衆は何してくらす

○船を出すなら沖見て出しやれ

○泣いてくれるな出船の先で

波にもませる兵庫丸

いつもバナ、の下はやみ

あすは出船の浪枕

人のうき世を忘れ貝

巻くもまきようてかゝりようて

もはや上りが見えそうな

苦を枕に波の上

沖の暗いのは雨と風

沖ちやかいが手につかぬ

○船を出すなら夜深に出しやれ

○船は新造でも櫓は新規でも

○船頭可愛や音戸の瀬戸で

○船はちやんころでも炭や薪はつまぬ

○船は来る々々百二十七艘

▲木挽唄

○木挽さんかよなづかしござる

○大工されより木挽はにくや

○木挽や山家の山にはすめど

帆かげ見るさへ氣にかゝる

船頭さんなければ走りやせぬ

一丈五尺の櫓がしわる

つんだ寶は米と酒

様ののる船まだ來ない

私の殿御も木挽さん

仲のよい木をひき分ける

木の實かやの實くひやせぬ

- 月が出た々々早よ出て拜め
- 木挽さんたちお大名の位
- 木挽女房になるなよ妹

▲仕事の雑

- うてやうて々々備後の表
- 仕事しやんせきり々々しやんと
- 定の夜延をしてねるからにや
- はたき八文篩ひ子は五文
- 情ないかな今日ふる雨に

つれてかへるぞ杉山へ
高いところへ陣がまへ
花の盛りを山小屋に

あすは出船の帆に上る
かけた襷の切れる程
お主様にも遠慮なし
絞り四文で何やのこる
殿は野へ出て濡れ仕事

- 桑は摘みたし梢は高し
- 私や桑つむ主はきざまんせ
- 桑つみ女と刈敷かりは
- 真田くみく話した事は
- 真田よう組むさて器量のよい
- 真田くみく主さんの事を
- 豆を蒔くにも蒔地をもたぬ

八、思慕愛情の部

誰に負はれて摘んで取る
春蠶あがれば二人着る
笹や小藪でがさくくと
もらすまいぞよ別れても
親に孝行な嫁ほしや
思ひつめます藁の敷
人の借地ぢや豆とれぬ

- 耶麻や大沼信夫で来たに
- 思ひ出せとは忘るゝからよ
- 深山清水は底からすむが
- 思ひ捨てるな叶はぬとても
- 離ればなれのあの雲見れば
- よしや今宵はくもらばくもれ
- 掛けてよいのは衣桁に小袖
- 様の寝姿今朝こそ見たれ
- 山が高うてあの家が見えぬ

四〇
 相馬會津と岩瀬ない
 思出さすに忘れずに
 君の心も底からか
 縁と浮世は時をまて
 あすの別もあの如く
 とても涙で見える月を
 掛けてたもるな薄情
 五月野に咲く百合の花
 あの家こひしや山にくや

- 狭い廣いと我がねた部屋を
- 心短氣な男をもてば
- 様よ々々とこがれて来たに
- こひにこがれて泣く蟬よりも
- こなた思ふてこれ程やせた
- 煙草一葉が千兩しよとまよよ
- 三月くはでも三年着でも
- 君の爲なら米山様へ
- 今年初めて漁師の夫もては

今はよそ目に見て通る
 胸に早がねつくごとく
 様は啞かよ物いはぬ
 鳴かぬ螢が身をこがす
 帯の二重が三重まはる
 様の寝煙草たやしやせぬ
 殿に着せたい紗の羽織
 はだし詣りもつらくない
 磯がドンドラついて眠られぬ

- 忘れ草だとうるたるものを
- 案じられます土用の卵
- 泣いて別れて松原ゆけば
- 向ひ小山のがんけのつゝじ
- 繻子の袴のひだとるよりも
- こなた思へばてる日もくもる
- 雨はふるとも身はぬらすまい
- 殿を見たさに朝水くめば

思出すやうな花か咲く
 君に變りはないかいな
 松の露やら涙やら
 及びなければ見てくらす
 様のきげんの取りにくさ
 冴えた月夜も闇となる
 様の情を笠に着て
 水は七桶殿は一目

九、雑の部

- 山家なれども我が古里は
- 人の事かと立寄きけば
- 鐘が鳴るかよ撞木がなるか
- 山を通ればいばらが止める
- よせばよいのに舌切雀
- 私の心と沖くる舟は
- 雨は天から横にはふらぬ

柴の庵もなづかしや
 きけば指名はわしが事
 鐘と撞木の間がなる
 いばら放しやれ日してくれる
 ちよいとなめたが身のつまり
 樂に見えても苦がたえぬ
 風のまはりで横に降る

○長の辛苦を一枚紙に

封じこまれた身のつらさ

○甘く見せても心分らない

君はしやうがの砂糖漬

十、子守の部

○ねんね(根来)へ行きたいけれど

川が恐ろし紀の川が

○この子ねむつたら何よりうれし

金の千両ももろたほど

○ねむれくよねむらにや叩く

何が叩いてねむらりよか

○守子三人よりやけんくわの基

一人欠けたら仲よかる

○守よ子が泣きや門へ出てゆすれ

ばらやぼたんの花見せて

○なくな赤ちやん泣かすな守子

内でお母さんの氣がもめる

○ねんねねた子にや赤い着物七つ

おきて泣く子にや縞のめ

○この子なせ泣くちのみたいか

乳ものみたいたかれない

○ねんねころ一この竹の市

竹にもたれてねた心

○なくな赤ちやんでく買うて上げる

お前見たやうな赤でくを

○泣いてくれるな泣かんでさへも

人の子ちやもの氣がもめる

○ねんねしなされおしまひなれ

あすは早やうからおきなされ

○守よ子寄よ日ぐれが大事

日暮なかん子に守要らぬ

○守がにくいとて破れ傘ささせ

可愛我が子も雨ざらし

○この子ねさせて蒲團をさせて ぐるりはたいて針仕事

○いくら泣いてもこの子の泣くは お花畠のきりくす

○ねんねしろ々々まだ夜は夜中 明けりやお寺の鐘がなる

○守子つらいもの子にや責めらせ 人にや樂なやうに思はれて

○ねたかねなんだか枕に問へば 枕もの言ふたねたといふ

○ねんねした子にや羽子板と羽根とねんねせん子にや羽子ばかり

○

○ねんねんよう、ころくよう、ねんく小山のきじの子は、泣くと
お鷹に取られるよ。

○

○ねんねこくねんねこよ、あちら向いても山ア山、こちらむいても
山ア山、やあまの中に何がある、しひや、どんぐり、かあやの實

○

○ねんねこせい、ねんねのお守はどこへ行つた、あの山こえて里
へ行つた、重の土産に何もろた、でんく太鼓に笙の笛、おきあがり
小法師に振つゝみ。

○

○けふはねんねの宮まゐり、宮へまゐらばどういふて拜む、この子一

代まめなやうに。

○おらが赤んぼはいつ出来た、三月櫻の咲く時に、道理でお顔が櫻色ねんねこせい〜。

○ねん〜ようころ〜よう、内のこの子のねた留守に、小豆よなげて米といで、赤のまんまに魚そへて、赤のよい子にくれようぞ。

○うちの此の子の枕の模様、梅に鶯松に鶴、梅になれても櫻はいや、

や、同じ花でも散りやすい。

○坊やはよい子だねんねしな、この子の可愛さ限りない、山で木の數萱の數、天へ上つて星の數、沼津へ下れば千本松、千本松原、小松原松葉の數より尙可愛。

○ねんねの生れたその日には、赤のまんまに肴そへて、父様のお箸で上げませうか、父様のお箸はと〜くさい、母様のお箸で上げませうか、母様のお箸は乳臭い、姉様のお箸で上げませう。

十一、酒の部

好きで飲む酒のむなでないが
倉を建てようと上戸になつて
お酒飲む人しんから可愛
加賀の菊酒一つはまわれ
やめておくれよ朝寝に煙草
お前そのやうに酒計りのんで
酔ふたお客とふくべの酒は

弱いからだを持ちながら
老の旅路を菰かふり
のまなきやのむより尙可愛
此方にのまそと取りよせた
わしも止めます茶碗酒
財政持つ氣か持たぬ氣か
のめばそのまゝ横になる

池田伊丹の上諸白も

お前見たやうに酒計りのんで
客と白鷺は立つのが見事
酒は呑みたし酒錢はもたず
酒の肴に鱒はさまれて
酒を飲みたさに言ふのぢやないが
酒も飲まんせ一合や二合
さした杯中見てあがれ
一つ上げます我君さまへ

錢がなければ見てもどる
わしに菰でも着せる氣か
飲んで立つのが尙見事
酒屋看板見てもどる
見ます逢ひます頼みます
杯やたゝみの模様ぢやない
お神酒あがらぬ神はない
中にや鶴亀五葉の松
よそへもらすな露程も

さした杯扇子の要
まねなお客様に何がな御馳走

わしとお前は末ひろく
師走筈、冬なすび

附 録

○滑稽早口練習文句

- 附記三遍間違はず唱へし者を優等とす
- お天とう様の光まらぼがつべか、金がしらの骨とげぼかつべか。
- となりのお客様は柿の好きな客で、よく柿をくふ客だ
- うらの古屋敷の古畑の古桃の木に、古ば、古ぼろ下げた
- お前の脚胖も皮脚胖、私の脚胖も皮脚胖、皮脚胖と皮脚胖と取つかいべいでないか皮脚胖

○前の古畑の古桃の木に、古ば、古ぼろ下げた。

○法勝寺の入道さきの關白と言つたらばお腹が立ちなすつたから今度
は太政大臣といふから法勝寺の入道さきの關白太政大臣様。

○どこちやの池には數年大蛇がすむさうちやがその蛇が雌蛇が雄蛇が
何ちやかかんちやかわからんちや。

○ひじきひめゆりひまはりひなたぼつこ。

大正九年六月三十日印刷
大正九年七月三日發行

趣味の俚諺附

定價廿五錢

編者 作山美八

發行者 三瓶喜三郎

印刷者 古内繁三

印刷所 東京市神田區表猿樂町二番地 豊成堂

東京市神田區表猿樂町二番地

發行所

常磐堂書店

電話神田二九四四番
振替口座東京三五二八番

不許
複製

工 20-15

終

